

『チャンドラカーンター』：迷宮と幻術使いの不思議な世界

安永 有希

Candrakāntā: The Mysterious World of Tilasma and Aiyāra

YASUNAGA Yuki

Abstract

This study aims to introduce the works of Devakīnandana Khatrī and explain two main motifs—“tilasma” and “aiyāra”—which were revealed in his trilogy, *Candrakāntā*, *Candrakāntā Santatī* and *Bhūtanātha*. Through this study, we have provided preliminary knowledge of Khatrī’s novels, which is necessary for future research.

Khatrī was one of the most renowned popular Hindi literature novelists of the early 20th century. His first novel *Candrakāntā* opened up a new horizon of popular Hindi fiction and has been widely read ever since. Traditionally, Hindi literature scholars have not conducted research on Khatrī’s works because they tend to take a utilitarian view, which emphasizes that a literary work should be beneficial for society. Consequently, Khatrī’s works have been excluded from Hindi literature because they have been considered to be merely entertaining.

However, one should not underestimate the contribution Khatrī made to Hindi literature. Through his trilogy, he established a new field in Hindi fiction: “*Tilasmī Aiyārī upanyāsa*.” With these works, he was able to entice the general public. Its fascinating story and simple Hindi enabled illiterates to learn Hindi through Khatrī’s novels and become Hindi literature readers.

In this study, two exotic motifs, “tilasma” and “aiyāra” are examined. “Tilasma” is one kind of labyrinth, which was built in ancient times. The one who is destined to conquer the labyrinth will obtain hidden treasures in it. “Aiyāra” is the name of the characters that play an important role in Khatrī’s novels. They fight the enemy by using sleeping powder and the unique technique of disguising. Consequently, they help their masters to conquer a labyrinth.



目次

0. はじめに
1. カトリー作品紹介
2. 小説『チャンドラカーンター』三部作の物語
 - 2-1. 物語の概要
 - 2-2. 複雑な物語
3. 二つのモチーフ：「迷宮」と「幻術使い」
 - 3-1. 「迷宮」とは何か
 - 3-2. 「幻術使い」という存在
 - 3-3. ティラスミー・アエーヤーリー小説とダースターン
4. おわりに

0. はじめに¹

19世紀末から20世紀初頭にかけて、北インドを中心に人々の関心を集めた小説があった。デーヴキナダン・カトリー (Devakīnandana Khatrī, 1861.7.18-1913.8.1) による『チャンドラカーンター』(Candrakāntā, 1892) である。『チャンドラカーンター』はかつて一世を風靡した初期のヒンディー小説であり、そこに描かれた恋愛冒険物語に人々は夢中になった。

この小説が執筆されたのは百年以上も昔のことではあるが、今もなお広く知られている。出版数が減少した現在は映像化される傾向にあり、例えば1994年から1996年にかけて、さらに2017年から2018年にかけてもシリーズ物としてテレビ放映されている。また2007年から2008年には、ボリウッドの名だたる俳優を配しての映画化が試みられてもいる²。‘Taalismaan’ と題

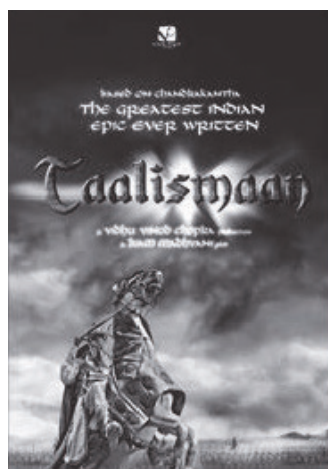


図1) 映画 Taalismaan のポスター (Vinod Chopra Films, ホームページより)

されたこの映画は、インドの国民的映画俳優であるアミターブ・バッチャン (Amitābha Baccana, 1942. 10. 11-) の迫力ある演技と壮大な舞台設定が垣間見られる予告編³が公開されたものの、残念ながら完成には至っていない⁴。

1892年、31才でヒンディー文学界に足を踏み入れたカトリーは『チャンドラカーンター』で成功を収めると、その続編『チャンドラカーンター・サンタティ』(Candrakāntā Santati, 1895-1905) および『ブートナート』(Bhūtanātha, 1908-1913) を執筆した。



図2) カトリーの肖像画 [Khatrī 1898a]

『チャンドラカーンター』から始まる一連の小説は、そこに描かれた「迷宮」(tilasma) と「幻術使い」(aiyāra) という二つのモチーフから「ティラスミー・アエーヤーリー小説」(Tilasmī Aiyārī upanyāsa) と呼ばれる。カトリーは恋愛・探偵・歴史といった様々なテーマで小説を執筆したが、読者から最も支持されたのは、このティラスミー・アエーヤーリー小説であった。

ティラスミー・アエーヤーリー小説はカトリー作品によって確立されたヒンディー小説の一分野であるが、出版当初からひとつの分野として認識されていたわけではない。このことは、カトリー作品に関する批評が掲載された当時の雑誌記事の中に「ティラスミー・アエーヤーリー小説」という用語が見られないことから明確である。総称としてのティラスミー・アエーヤーリー小説は、後のカトリー批評のなか、1930年頃から1950年代にかけて次第に確立されていった。

カトリーに追随した作家らがこの分野で執筆したことで、ティラスミー・アエーヤーリー小説は19世紀末から20世紀初頭にかけて盛んになっていたものの、カトリーと同様の成功を収める作家は現れなかった⁵。その結果、カトリーの死後、ティラスミー・アエー

ヤーリー小説は徐々に衰退していく。その間、ゴパールラーム・ゲヘムリー⁶ (Gopālarāma Gahamārī, 1866-1946) の活動によって探偵小説が発展し、さらにプレームチャンド⁷ (Premacanda, 1880-1936) がヒンディー文学界に登場すると、ヒンディー小説の主流は娯楽から写実主義へと移り変わっていく。

カトリーがヒンディー文学に残した功績として、新たな小説分野の確立のほかに一定の読者層を生み出したことも挙げられる。当時の大衆の話し言葉とされるカトリーの言語は、デーヴァナーガリー文字さえ学べば理解できるものであった。そのため従来は聞き手として存在していた非識字者らが、カトリー作品を読むために、あるいは読みながら文字を学び、ヒンディー文学の読者に変貌していったのである [Madhureśa: 58; Śarmā 1993: 13; Śukla: 499; Yugeśvara: 3]。

この二つの功績は、いずれもヒンディー文学において極めて重要な意義を持つ。しかし、「文学は社会にとって有益なものであるべきであって、有害なものであってはならないとする功利主義的文学観」[高橋: 156] が根底をなすヒンディー文学界は、娯楽に徹したカトリー作品を害あるものとみなし、積極的な研究に乗り出すものは少数にとどまった。その結果、従来の文学史研究におけるカトリーに関する記述は、読者層形成という功績に言及するか、作家や作品についての情報を列挙するだけであった。ティラスミー・アエーヤーリー小説がカトリーと共に誕生し衰退していったのも、この小説に対する当時の酷評が作家から執筆する意欲を奪ってしまったからだとも考えられる [Ānanda: 273]。厳しい評価に晒されて短命に終わったティラスミー・アエーヤーリー小説が、これまで研究対象と見なされることが少なかったのも無理はない。

しかし、ヒンディー小説の歴史を語る際に決して避けて通れないカトリー作品を研究対象とすることは、ヒンディー文学研究にとっても重要である。カトリーが成功を収めた理由は、「娯楽的な物語」と「大衆的な言語」、そして「潜在的な読者の存在」という三点に集約できる。この三点を考察することによって、一

般読者にほとんど読まれることがない文学作品⁸の研究からは窺い知ることのできない、読者の生活や嗜好が読み取れるであろう。また、短命に終わったティラスミー・アエーヤーリー小説の中でも、カトリー作品だけは確実に版を重ねて後世まで読み継がれている⁹。このような状況の中、娯楽であるからと文学から切り捨てた過去の評価を見直し、ヒンディー文学史の中で改めて位置づけた上で、娯楽的な物語・大衆的な言語・潜在的な読者の存在といった観点からカトリー作品を考察することは、当時の小説のあり方や読者の状況、さらにはヒンドゥー文化を考察する上で有用となる。ここにカトリー研究の意義がある。

本稿はカトリー研究の端緒としてその執筆作品を紹介すると共に、カトリーの代名詞とも言える『チャンドラカーンター』三部作が実際にどのような小説であるのか、そしてそこに描かれた二つのモチーフがどのような性質を持っているのかを明らかにする。これは、物語・言語・読者という三つの観点からカトリー研究を行う前段階として、これらの研究の予備知識を整理するものである。なお、総称としてのティラスミー・アエーヤーリー小説の成立過程、およびカトリー評価の変遷についての考察は別稿で取りあげる。

1. カトリー作品紹介¹⁰

カトリーに関して何かしら記述しようとするとき、まず突き当たる壁はその情報量の少なさである。カトリーの生い立ち・学んだ言語・作家になる前に経営していた商店・作家として成功したあと設立した出版社・交友関係・家族関係に至るまで、カトリー本人は何も語ることはなく、また先行研究に見られる僅かな記述は確たる証拠を挙げずに語られる。そしてこれは、カトリーが手がけた数々の小説についても同様である。従来のカトリー研究ではその全作品数ですら曖昧であり、出版年に至っては様々な意見が挙がる。例えば『チャンドラカーンター』の出版年は1888年とも1891年とも言われており、原本を手にしにない限り、その正誤を判断することは不可能である。

また、カトリーが活動していた当時、イギリス植民地下の言論統制の過程で、出版物は図書登録制度によって目録に記録されたため〔藤井：147〕、(旧) インド省図書館 (India Office Library、以下 IOL) に収められた目録を調査し原本を閲覧することで、カトリーの作家としての活動は詳らかになるはずである。しかしながら実際は、カトリー作品の全版を IOL が所有しているということではなく、目録に記載された情報も、その出版状況を断片的に伝えることしかできない。つまりカトリー作品を紹介する中で、その記述に曖昧な部分が残るのは避けられないのである。カトリー作品の出版状況の解明は未だ課題として残される。

本章では、現在判明している範囲内でカトリー作品を紹介する。この作品紹介の基盤となるのは、目録に記載された情報・入手可能な原本・原本に掲載された広告等の情報である。IOL による目録は、主に 19 世紀後半の出版物が記録されたものが 1 冊と [Blumhardt 1902]、1903 年から 1975 年までの書誌情報を収めた 13 冊があるが、19 世紀後半の書誌情報については全くもって不十分なものである¹⁾。その時代の出版物についてはむしろ、(旧) 英国博物館 (British Museum) の図書部による目録に詳しい [Blumhardt 1893; 1913; Blumhardt & Wilkinson]

上述の目録および原本から、カトリーの処女作である『チャンドラカーンター』の初版出版年は明確となる。全 4 章からなる『チャンドラカーンター』の初版は、バナールスのハリプラカーシュ印刷所 (Hariprakāśa Yantrālaya) から一章ずつ、四回に分けて出版された。第 1 章から第 3 章の初版それぞれの最後には、紀元前 57 年を元年とする ヴィクラマ暦で「1948 年」と記載されてお

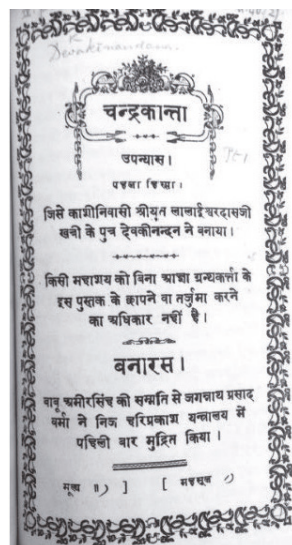


図 3) 『チャンドラカーンター』第一章初版の標題紙 [Khatri 1892a]。

り、さらに第 4 章初版のあとがきには西暦で「1892 年 11 月 21 日」と明記されている [Khatri 1892a; 1892b; 1892c; 1892d]。ヴィクラマ暦はチャイトラ月と呼ばれる西暦の 3 月にあたる月から始まるため、西暦に換算する場合には具体的な日付を把握する必要がある。『チャンドラカーンター』初版の原本に出版日は記載されていないが、第 1 章¹²⁾初版に関しては目録に「1892 年」と明記されていることから [Blumhardt 1893: 41]、『チャンドラカーンター』各章の初版出版年はいずれも 1892 年であるとみなしてよい。さらに、同じ年に全 4 章が一冊に纏められて出版されていることから [Blumhardt 1902: 61]、単行本としての『チャンドラカーンター』の初版出版年も 1892 年である。

読者から支持を得た『チャンドラカーンター』は、複数の言語に翻訳された。1899 年にネパール語訳、1908 年に英訳の初版がそれぞれ出版されている [Khatri 1899e; 1908b]。また、1899 年 12 月発行の『ウパニヤース・レヘリー』 (Upanyāsa Laharī) 第 5 巻第 1 号の最後に掲載された書誌一覧から、1899 年以前にウルドゥー語訳も出版されていることが分かる [Khatri 1899h]。

1892 年に出版された単行本『チャンドラカーンター』の裏表紙でカトリーは、パトナー近郊の町ムザッファルプルに数ヶ月滞在する間に『ナレーンドル・モーヒニー』 (Narendra Mohini) という新たな小説を書き上げ、現地の出版社ナーラーヤン・プレス (Nārāyaṇa Presa) より出版中である旨を述べている [Khatri 1892d]。したがって『ナレーンドル・モーヒニー』の初版出版年も 1892 年である。この小説には、ナレーンドル王子の結婚相手ランバーに嫉妬した美女モーヒニーが、嫉妬からランバーも王子も殺そうとするが失敗し、自ら命を絶つという物語が描かれている [Khatri 1907a]。

カトリーは『チャンドラカーンター』を書き上げた時すでに、続編を執筆することを表明していた [Khatri 1892d: 127]。この段階でカトリーが構想していたのは、『チャンドラカーンター』の主人公ビーレンドルシンフ王子の息子二人の物語を全 12 章で執筆する

というものであったが、実際に出版された『チャンドラカーンター・サンタティ』の物語は、その倍にあたる全24章から成る。『サンタティ』はカトリーが設立した出版社レヘリー・プレス (Laharī Presa) 発行の月刊誌『ウパニヤース・レヘリー』において連載という形で発表された¹³。『ウパニヤース・レヘリー』の創刊号は現在入手できないが、1899年7-8月号が発行から4年目にあたる第4巻第11-12号であることから [Khatrī 1899g]、創刊号は1895年9月頃に発行されたと推察できる。

また『ウパニヤース・レヘリー』第5巻第1号(1899年12月出版)から、『サンタティ』の連載と並行して『グプト・ゴードナー』(Gupta Godanā) という歴史小説の連載も始まった。この小説には、ムガル帝国で病に伏せているシャージャハーン王の四人の息子が権力をめぐって争っていた頃の物語が描かれている [Khatrī 1899h]。カトリーはこの小説の第1章のみを執筆しており、第2章以降はカトリーの友人¹⁴であり歴史小説や社会小説を執筆していた作家キショーラーラール・ゴースワミー (Kīśorīlāla Gosvāmī, 1865-1932) が執筆した [Gosvāmī 1922]。第2章初版は1906年2月8日に出版されており [SAMP]、なぜカトリーが生前に『グプト・ゴードナー』の執筆をゴースワミーに譲ったのかは定かでない。

恋愛小説である『クスムクマリー』(Kusumakumārī, 第5版1914年出版) には、王子とその家来が一人の王女に恋をしてしまい、そこに王女との結婚を企む王も登場し、三者が王女を巡って争う物語が描かれている [Khatrī 1914]。

ヒンディー文学において探偵小説が発展する初期段階に、カトリーも数編の探偵小説を執筆していた。

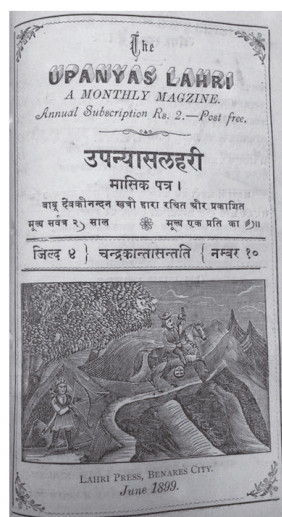


図4) 月刊誌『ウパニヤース・レヘリー』の標題紙 [Khatrī 1899f]。

『ビーレンドルビール』(Birendrabīra, 第6版1917年出版) は、王子殺しの罪を着せられて牢獄に閉じこめられてしまったビールが、それがカラヌ王の仕業であったことを知り、さらに父親をも殺害していたことを知って、カラヌ王に殺されたと思っていた兄と共に父親の敵を討つ物語である [Khatrī 1917b]。『カージャル・キー・コートリー』(Kājara kī Koṭharī, 第3版1911年出版) は、親族の一人が遺産を手に入れるために結婚式当日に花嫁を掠ったことを知った花嫁の父親らが、花嫁を取り戻す物語である [Khatrī 1911]。

『クスムクマリー』および『ビーレンドルビール』については、1898年に出版された『チャンドラカーンター』第1章第3版に掲載されたレヘリー・プレス出版の書誌一覧にタイトルが記載されていることから、1898年以前に出版されたと推察できる [Khatrī : 1898a]。同様に、『カージャル・キー・コートリー』は1899年出版の『チャンドラカーンター』第2章第3版の書誌一覧に記載されている [Khatrī : 1899d]。

カトリーは小説を執筆するだけでなく、翻訳も手がけていた。『ラェーリー・マジヌー』(Lailī Majanū, 第5版1907年出版) はアラブの古典的な恋物語であり、美女ラェーリーに恋い焦がれてマジヌー (majanū/majanūna, 狂人) と呼ばれるようになった青年カエースの悲恋が描かれている [Khatrī 1917c ; SAMP]。この小説も1898年出版の『チャンドラカーンター』第1章第3版に掲載された書誌一覧にタイトルが記載されているため、1898年以前に出版されたと推察できる [Khatrī : 1898a]。また、『シェーターン』(Śaitāna, 初版1907年出版) はレーノルズ (George William MacArthur Reynolds, 1814-1879) による *Faust: A Romance of the Secret Tribunals* (1847) の翻訳であ

- | |
|--|
| 1. ティラスミー・アエーヤーリー小説
・チャンドラカーンター
・チャンドラカーンター・サンタティ
・ブートナート
2. 恋愛小説
・ナレンドル・モーヒニー
・クスム・クマリー
3. 探偵小説
・ビーレンドルビール
・カージャル・キー・コートリー
4. 歴史小説
・グプト・ゴードナー
5. 翻訳小説
・ラェーリー・マジヌー
・シェーターン |
|--|

図5) カトリー作品一覧

る [Khatrī 1907b]。

『チャンドラカーンター』三部作を締めくくる小説『ブートナート』の第1章初版は1908年10月7日に出版された[SAMP]。続いて第2章が1909年7月1日、第4章が1911年12月1日、第5章が1912年7月4日、第6章が1913年7月26日に出版されている [Khatrī 1912; 1913; SAMP]。そして第6章が出版された6日後の1913年8月1日、52才の若さでカトリーは亡くなった。晩年は一年に一章という、非常にゆっくりとしたペースで執筆していたようである。

2. 『チャンドラカーンター』三部作の物語

2-1. 物語の概要

2-1-1. 『チャンドラカーンター』

『チャンドラカーンター』は『サンタティ』という壮大な物語の入口である。迷宮とは何か。幻術使いとは何か。この小説ではカトリーが描く世界に違和感なく身を置き、その物語に引き込まれる素地が作られる。そして読者は『サンタティ』の世界にのめり込むのである。以下は『チャンドラカーンター』の物語の概要である¹⁵。

ノーガル・ヴィジャエガル・チュナールガルの三国を、それぞれスレーンドル王・ジャエ王・シヴダット王が治めていた時代のことであった。ノーガル国の王子ビーレンドルとヴィジャエガル国の王女チャンドラカーンターは恋仲にあった。しかし二国間の関係が悪化した今、二人は会うことすらできずにいた。そこで二人の手紙のやり取りを仲介していたのが、ノーガル国大臣の息子で王子の親友テージである。テージは優秀な幻術使いでもあった [Khatrī 1892a: 1-2]。

王子と王女の恋仲を邪魔する者もいた。ヴィジャエガル国の大臣の息子、クルールである。クルールは王女に惹かれており、恋敵であるビーレンドルを陥れようと企んでいたのだ。しかし、テージの機転によりジャエ王の逆鱗に触れたク

ルールは、チュナールガル国のシヴダット王に助けを求める [Khatrī 1892a: 35-54]。

ヴィジャエガル国はチュナールガル国との戦いに備えて、ノーガル国に協力を要請した。二人の王の不仲の原因は、クルールの悪巧みによるものであり、クルールが逃亡した今、その関係はようやく修復されたのだ。そして連合軍が戦に備えていたある晩のことである。チャンドラカーンター王女と、その友人で幻術使いでもあるチャプラーが、チュナールガル国に仕える幻術使いらに誘拐されてしまう [Khatrī 1892a: 127-129; 1892b: 1-3]。

ビーレンドル王子とテージは、チュナールガル軍との戦の合間にも王女たちを助け出そうと奮闘する。一方、王女たちは自力で敵から逃げ出したものの、とある廃墟を歩き回っているうちに、その奥深くに閉じ込められてしまった。この廃墟は迷宮への入口であった [Khatrī 1892b: 50-61]。

テージは敵国の幻術使いを捕らえては秘密の洞窟に幽閉しており、王女たちが奥深く入り込んだ廃墟の先も、その洞窟の中へと繋がっていた。洞窟の中でようやく王女とチャプラーを見つけた王子であったが、二人は切り立った崖の上におり、救出することはできなかった。二人を助け出すには、王女のようにチュナールガル国側の廃墟から入り、迷宮を征服するほかない。迷宮を征服しない限り、その中に迷い込んだ者を助け出す方法はないのだった [Khatrī 1892b: 91-100]。

廃墟に入った王子たちは、そこに仕掛けられた絡繰りをひとつひとつ解き、先へ進んでいく。一方、連合軍はチュナールガル軍との戦に勝利を収める。戦が終わり、残すところは迷宮を征服して王女を助け出すことであった。紆余曲折の末、無事に王女の救出に成功した王子は、迷宮に隠された金銀財宝を手に入れ、めでたく王女と結婚した [Khatrī 1892c; 1892d]。

ここでは簡単に紹介するにとどめたが、実際にはこの合間合間にも様々な事件が起きる。ビーレンドル王

子もテージも敵国に囚われの身となったり、逆にシヴダット王の幽閉に成功したりもする。正体不明の覆面の騎士や森の娘、盗賊なども登場し、『チャンドラカーンター』の魅力的な物語を作り上げている。

2-1-2. 『チャンドラカーンター・サンタティ』：子供たちの物語

全4章の『チャンドラカーンター』に続いて執筆された『サンタティ』は、全24章にわたって描かれた非常に長い物語である。一章はおよそ120ページ前後で書かれており、全章をあわせると3,000ページ近くにもなる。その物語は複雑を極め、手短かに述べるのは難しい。そのため本章で紹介する概要は、『サンタティ』の物語のごくごく一部である。

題名にもなっている「サンタティ」とは、ヒンディー語で「子供」の意味を持つ。つまり『チャンドラカーンター・サンタティ』はチャンドラカーンター王女の子供たちを描いた物語である。

チャンドラカーンター王妃とビーレンドル王に二人の息子インドラジート王子とアーナンド王子が生まれ、みなチュナールガル国で穏やかに暮らしていた。一方、戦に敗れたシヴダット王はシヴダットという名の国を建て、いつかビーレンドルに復讐しようと機会を窺っていた。ビーレンドルがチュナールガル国王の座に就いて二十年が経った頃、予言通りチュナールガル国に苦難の時代が訪れようとしていた。ことの始まりは、一人の幻術使いがシヴダット国に仕える幻術使いらに捕らわれるという些細な出来事であった。捕らわれた幻術使いは無事救出されるが、その間に二人の王子が失踪してしまう [Khatri 1898b: 1-19]。

『サンタティ』にはチュナールガル・シヴァダット・ジャマーニヤー・ローフタースなどの国家間で起こる様々な事件が描かれている。登場人物も数多く、偽名を使う者や他人になりすます者の存在によって、登場

人物間の関係を把握するのも一苦勞である上、各々が様々な思惑を持って行動するため、非常に複雑な物語となっている。捕らえ捕らわれ、騙し騙され、主人公たちは一進一退しながらも、最終的に悪の撲滅へと向かっていく。その中でも物語の核となるエピソードは、「幻影の妃」と呼ばれるラクシュミー王妃が支配する、ジャマーニヤー国の広大な迷宮を巡ったものであろう。

チュナールガル国の二人の王子がジャマーニヤー国の迷宮を征服する運命にあることを知った幻影の妃は、迷宮が征服される前に二人の王子を亡き者にしようと考えていた。二人の王子は味方の幻術使いや仲違いした妃の妹カムリニー王女らの助けを得て、幻影の妃に立ち向かっていく。その過程で、幻影の妃はラクシュミー王妃になりました偽者であることを王子らは知った。迷宮に幽閉されたラクシュミー王妃は何者かに助け出され、幻術を学んで幻術使いとなり、正体を隠したまま幻術使いターラーとして妹カムリニーに仕えていたのである [Khatri 1899a: 7-8]。

たいてい登場人物は善と悪に二分され、最終的には善が悪に打ち勝つ。しかしこの区分に捕らわれない人物が一人だけ登場する。幻術使いのブートナートである。ブートナートはかつて幻影の妃に仕え、さらに誤って人を殺してしまうなど、様々な罪を犯していた。しかし過去の罪を悔いたブートナートは、善行を積み重ねることで汚名をそそごうとしていた。このブートナートの暗躍もあって幻影の妃は殺害される。その貢献が認められて過去の罪を許されたブートナートは、スレーンドル大王に使える幻術使いとなった [Khatri 1906: 115]。

2-1-3. 『ブートナート』：一幻術使いの苦悩

『サンタティ』の最後で、ブートナートは自らの数

奇な人生を一冊の本にまとめ、スレーンドル大王に献上した。その本の名が『ブートナート』である。この小説はブートナートが執筆した手記という設定ではあるが、常にブートナートの視点から描かれているというわけではない。その冒頭は、次のようなブートナートの告白から始まる。

父は私をガダーダルと名づけ、私は長年この名で人々に知られていた。しかし、とある機会に名をブートナートに変え、今ではこの名のほうが知れわたっている。今日、私はスレーンドル陛下の命を受けて手記を書くことになった。しかし私はこれを手記という形ではなく、一編の小説として書こうと思う。人々は「おまえの人生から教訓が得られるだろう」と言うけれども、過ちと怖い出来事に満ちた私のつまらない人生に、興味を惹かれる者などいないだろう。そこで手記という手法から離れ、小説として面白みを与えることが必要なのだ。親愛なる読者諸君は、どうか、他の誰かがブートナートの人生について語っているものと考えてほしい。ブートナート自らが綴っているのではなく、この小説の筆者は他の者である、と。[Khatrī 1917a: 1] (筆者試訳)

カトリーが亡くなった時点で『ブートナート』の物語が完成するには程遠く、その後を継いで執筆することになったのがカトリーの息子ドゥルガープラサード・カトリー (Durgāprasāda Khatrī) である。ドゥルガープラサードは第7章から第21章までを執筆し、『ブートナート』の物語を完成させた。

後を継いで執筆するにあたってドゥルガープラサードに求められたのは、定められた点と点を線で結ぶ作業であった¹⁶。というのも、ブートナートの人生の中で語られる事件は『チャンドラカーンター』や『サンタティ』の物語と並行して起きたものであるから、ブートナートの主な行動や思考は細切れながらも明確であったのだ。『ブートナート』は『チャンドラカーンター』に描かれた時代より少し前から始まり、『サ

ンタティ』の物語が始まるまでの20年ほどの空白の期間についても触れられている。前作に描かれていない部分は想像力で補う必要があるが、空白部分の多い幻影の妃がラクシュミーと入れ替わる前までの物語はデーヴキーナンダンが第6章までに執筆しており、その後の物語を書き進める基盤は十分に整えられていた。

しかしながら、『チャンドラカーンター』や『サンタティ』と同様に『ブートナート』の物語も非常に複雑であるため、その執筆には困難が伴ったとドゥルガープラサードは述べている。

誰かが途中で書いたひとつの文章ですら、別の者が上手くまとめるのは難しいものだ。それなのに、このように広大で複雑に入り組んだ小説を別の者の手で完結させることが、どれほど難しいことか。このことを記憶にとどめて、愚かな現在の筆者を許してほしい。[Khatrī 1935: 170]

本稿では、カトリーによって執筆された第1章から第6章までを取りあげて簡単に紹介する。

チュナールガル国の王座にシヴダットが就いて、二年が経った時のことであった。チュナールガル軍の指揮官であるプラバーカルPrabhuの妻インドゥマティを見初めたシヴダット王は、プラバーカルを殺してインドゥマティを手に入れようとしていた。そこでプラバーカルは妻と共に逃亡する [Khatrī 1917a: 1-17]。

道中で夫とはぐれたインドゥマティは、ガダーダルに殺害されたダヤーラームの二人の妻に会った。二人の妻はインドラデーヴの元に身を寄せ、ガダーダルに復讐をしようと心に決めていた。そのことを知ったガダーダルは、秘密を知る者はみな殺害しようと企てるが失敗し、姿をくらましてしまう [Khatrī 1915: 250-254]。

その後、ダヤーラームが生きていることが判明する。ガダーダルが殺したと思っていたのは別人

であり、ガダーダルは騙されて罪を犯していたのであった。死んだと思われていたダヤーラームは、ジャマーニヤー国の迷宮の監視役に捕らえられていた。インドラデーヴはジャマーニヤー国からダヤーラームを救出し、ガダーダルとも和解する。しかし後に、些細なことからガダーダルは監視役と手を組むようになった。後に幻影の妃と結婚することになるゴーパール王が、まだジャマーニヤー国の王子であった頃であった [Khatri 1916a: 232-235]。

2-2. 複雑な物語

『チャンドラカーンター』三部作の物語は非常に複雑である。例えば『チャンドラカーンター』は全4章で描かれており、その各章はそれぞれ20以上の節¹⁷に分けられる。つまり全4章中に80以上の節が存在し、各節に様々な場面が描かれている。三部作では50人を超える登場人物が各地で行動しているため、細かく節立てすることによって多くの事件を描写することが可能となるのである。様々な場面を行ったり来たりするために、時の流れが前後することも多い。

そのためカトリーは、長い間を置いてある場面について描写するとき、それが以前はどのような状況であったのかを簡潔に説明し、読者に思い出させている¹⁸。

ここで、読者諸君にはジャマーニヤー国の迷宮に注目してほしい。インドラジート王子とアーナンド王子をその迷宮に残してきてから長い時間が経ってしまい、今、彼らの様子を合間に書かないことには物語は前に進まないのだ。

私はこう綴ってきた。「インドラジート王子が迷宮の書を解説する方法をアーナンド王子に教えていたとき、寺院の後ろから叫び声が聞こえてきた。[Khatri 1899c: 1] (筆者試訳)

それではまた、読者諸君をチュナールガル国へ

と向かうビーレンドル王の軍営地へとお連れしよう。諸君の記憶にも残っていることだろう。愚かなマノールマーが迷宮の剣によってキショーリーとカームニー、カムラーの首を切り落とし、嬉しそうに何かつぶやいていると、後ろから声が聞こえてきたのだ。[Khatri 1900: 84] (筆者試訳)

特に、カトリー作品を読むため、あるいは読みながら文字を学んだ読者は、長く複雑な物語の途中で混乱する可能性もある。そこにカトリーが寄り添い、読者を正しい方向へと導いていくのである。

同様に、挿絵も複雑な物語を理解する手助けとなる。当初、『チャンドラカーンター』に挿絵は描かれていなかった。しかし、子供や十分な教育を受けていない読者の読解力を知ったカトリーは、『サンタティ』の連載中から挿絵を入れるようになった [Rāya: 276]。月刊誌『ウパンニャース・レヘリー』第5巻第2-3号の表紙で、挿絵に関してカトリーは次のように読者に呼びかけている。

当初、『チャンドラカーンター・サンタティ』は挿絵なしに売られていましたが、今は挿絵付きになっています。以前この小説を購入し、自宅で挿絵付きにしたい方は、別に出版されている挿絵を購入し、お持ちの本に添付してください。[Khatri 1900]



図6) ビーレンドル王子(右から2人目)とチャンドラカーンター王女(右から3人目)が密会する様子 [Khatri 1908a: 37]。

このように、物語の案内人としての作家の存在や、視覚的に分かりやすい挿絵の追加といった読者に対する配慮も、『チャンドラカーンター』三部作が広く支持された一因であろう。

3. 二つのモチーフ：「迷宮」と「幻術使い」

『チャンドラカーンター』三部作には「迷宮」と「幻術使い」という二つのモチーフが描かれている。どちらかが欠けても物語が成立しなくなるほど、『チャンドラカーンター』の物語の中で非常に重要なモチーフである。

3-1. 「迷宮」とは何か

三部作の物語の舞台となるのが「迷宮」である。迷宮は物語が幾重にも展開する重要な場であり、その全貌は物語を読み終えるまで見えてこない。

三部作にはいくつかの迷宮が描かれており、いずれも古い時代の王たちが造らせたものであった。多くの財宝を所有する相続人のいない王が、いつかその家系に現れる有能な男子だけに財産を渡したいと考えて造らせていたのである。子孫の中で誰が適切であるかを調べ上げるのは、天文学者や占星術師らの役目であった。さらに天文学者・占星術師・アーユルヴェーダの医師・職工・タントラ行者の指示に沿って隠し置いた財宝の上に迷宮を建て、定められた者だけが取り出すことができるような細工が施されていた [Khatri 1892d: 105-107]。

迷宮を征服すると定められる人物は、大抵の場合、王子や王女である。彼らは迷宮の中に隠された石碑や書物を見つけ、そこに書かれた指示に従って絡繰りを解き、最終的に財宝を手にする。『チャンドラカーンター』にはチュナールガル国の迷宮と、ノーガル国の山間に造られた小さな迷宮という二つの迷宮が描かれており、それぞれビーレンドル王子とチャンドラカーンター王女が征服する運命にあった。さらにチュナールガル国の迷宮を征服した者は、ノーガル国の迷宮

を征服する娘と結婚すると定められていた。ノーガル国の迷宮には嫁入り道具が用意されていたのである [Khatri 1892d: 105]。つまり、ビーレンドル王子とチャンドラカーンター王女がそれぞれ迷宮を征服することも、その後に二人が結婚することも、あらかじめ定められていたのであった。

迷宮が征服されなくても、その一部に出入りする方法を知る者も存在し、さらに、誰でも入手できる宝や不思議な力を持つ武器なども迷宮に隠されていた。例えば、幻術使いのテージが捕らえた敵を幽閉していた、洞窟を抜けた先にある崖に囲まれた平原もノーガル国の迷宮の一部である。また、『サンタティ』では「幻影の妃」という悪役が迷宮を支配しており、征服することはできなくてもその恩恵にあずかっていたために、後の混乱が生み出されたのであった。

それでは、迷宮を征服するとはどういうことだろうか。定められた者が迷宮を征服すると、そこに隠された財宝を手に入れると同時に、それまで迷宮に捕らわれていた者はみな解放される。迷宮を征服するということは、そこに仕掛けられた数々の細工を解くということであり、細工に掛かったために迷宮に迷い込んでしまった者も、外に出られるようになるのである。

チャンドラカーンター王女も、そのような細工に掛かって迷宮に入り込んでしまった一人である。ここで、チャンドラカーンター王女がどのように迷宮に捕らわれ、ビーレンドル王子らがどうやって細工を解いたのかを一例として挙げたい。森に迷い込んだ王女は、とある廃墟の庭で一体の鷺像を見つけた。その鷺像はとても繊細な造りをしており、王女は興味津々に鷺像を観察していた。すると不意に、その鷺が動き出したのである。

鷺が羽を広げたのを見ると、王女は鷺の後ろへまわった。そばに転がっていた石に足を置くと、鷺はさっと辺りを歩き回り、くちばしで王女を持ち上げて飲み込んだ。それから元の場所に戻ると、羽を閉じ、口も閉じた。[Khatri 1892b: 55] (筆者試訳)

こうして王女は迷宮の中に閉じ込められてしまう。ビーレンドル王子は王女を救出するために迷宮の入口となった廃墟の中を調べまわり、一冊の書物を見つけた。その書物には迷宮を征服する方法が記されており、そこに王女を飲み込んだ鷲像を処理する方法も記されていた。

鷲の頭側の地面に大理石がはめ込まれている。その石は簡単に動かすことができる。石を掘り出し、酢の中でしっかり細かく粉にして鷲の全身に塗りつけるのだ。鷲もセメントでできている。二時間ほどですっかり溶けて崩れるだろう。その下に紐や滑車、車輪、部品がある。すべて壊すのだ。そうすれば下から部屋が出てくる。[Khatrī 1892b: 109] (筆者試訳)

王女を飲み込んだ鷲は絡繰りによって動いているため、その絡繰りを壊してしまえば、先を自由に行き来することが可能となるのである。このように王子は絡繰りを壊しては迷宮の外で休み、翌日さらに先に進んで別の絡繰りを壊し、また外に出て夜を明かす。そして最後には、王女の救出に成功するのである。

このように迷宮を征服するときは、いわゆる攻略本とも言える書物に記された手順に従って進んでいかねばならない。粉を塗ると溶ける像や迷宮を征服する人物を示した暗号など、書物の記述を頼りに時に迷宮に閉じこめられた王女の救出のため、王女救出後は迷宮を征服すること自体を目的として、王子たちは様々な行動を起こす。さらに、この攻略本である書物も時が来たら迷宮を打ち壊す手段となり、インドラジート王子が書物を「こねて」小さな祭壇に塗りつけると、その祭壇が燃えて下から抜け道が現れるのである [Khatrī 1900: 79-81]。

3-2. 「幻術使い」という存在

『チャンドラカーンター』三部作には数多くの幻術使いが登場する。国家間の戦において武装した軍隊が

ぶつかり合う裏で、敵味方の幻術使いが隠密行動を繰り返し広げ、戦の結果を左右する。幻術使いは大臣自身や大臣の息子である場合もあり、それなりに発言権を持っていた。大抵の幻術使いの身分は高く、主君である王や王子も幻術使いを頼りにしており、幻術使いの助言によって事が進められることも多い。

幻術使いはスパイのように敵地に乗り込んで情報を探ることもあるが、これは専ら幻術使いとは別の存在として描かれている密偵の役目であり、大抵の場合、幻術使いは情報を探る以上の物事を成し遂げることが求められる。そしてその目的を成し遂げるため、幻術使いは並外れた体力と知力・精神力を持ち、あらゆる術に通じていた。例えばシヴダット王に捕らわれたテージを助け出すため、歌い手に変装した幻術使いのチャプラーがその歌声でシヴダット王を魅了したように、また、呼び寄せられたテージがチャプラーの歌に合わせて素晴らしい音色の笛を奏でたように、幻術使いは武術だけでなく芸術など様々な方面に秀でてみえる。

眠り薬を多用し、敵を眠らせている間にその人物になりすまして敵陣に潜り込む。そこで敵方の行動を操ることもあれば、捕らえられた仲間を助け出したり、逆に敵を捕らえたりすることもある。これが幻術使いの基本的な行動である。

下図は『チャンドラカーンター』に掲載された挿絵である。幻術使いのテージらはクルターとパージャーマーを身につけ、腰には革袋と短剣を携帯しており、手



図7) 幻術使いのテージ(右)と弟子のデーヴィー(左)が敵国の幻術使い(中央)を捕らえている様子 [Khatrī 1908a: 28]。

には投げ縄を持っている。これは幻術使いの普段の姿であり、革袋・短剣・投げ縄は幻術使いの基本的な所持品である。特に革袋は幻術使いにとってなくてはならない大事な物であり、その中には変装道具や薬・蠟燭などが収められている。

幻術使いは目的を果たすために様々な変装をする。牛飼いや香水売りというような職業に扮することも多い。その中でも幻術使いを特徴づける重要な点は、彼らが特定の個人にも変装することができるという点であろう。例えばテージは、ビーレンドル王子にもチャンドラカーンター王女の侍女チャンパーにも変装しており、その変装は親しい者にすら見破られることはないほど完璧なものであった。もはや変装ではなく変身とも言える技術ではあるが、これはあくまでも変装である。テージが変装する場面を見れば、変身しているのではないことは明らかである。

テージは革袋から蠟燭と鏡を取りだし、蠟燭に火を灯した。鏡を見ながら自分の顔を侍女の顔に変え、侍女の服を着ると、その場に侍女を残して王宮へ向かった。七、八人の侍女たちとおしゃべりしている王女とチャプラー、チャンパーのもとにやって来ると、侍女に変装したテージも片隅に行って座った。[Khatrī 1892a: 15] (筆者試訳)

このあと変装したテージに向かって「どうしたの、ケートキー」[Khatrī 1892a: 15] とチャプラーが呼びかけていることから、テージは侍女らしく変装したのではなく、侍女のケートキーという特定の個人に顔を変え、変装したことが分かる。

顔を変えるとはどういうことか。どうすれば、ある人物そのものの顔になれるのか。『チャンドラカーンター』にはその具体的な方法は書かれていないが、『サンタティ』には塗料や偽のホクロ・髭といった具体的な道具が描かれている。テージが薬で眠らせた敵の幻術使いの姿を全くの別人に変える場面でも、その変装の技術が垣間見ることができる。

とある強力な薬品で顔に偽の傷跡を付けた。その傷跡はテージ以外の誰にも落とすことはできない。まるで昔からある古傷のようであった。さらにその全身を黒の粉で染め上げた。この粉はテージが自ら調合したもので、次のような性質がある。まず、この粉で染めたところは黒檀のように黒くなる。そしてバナナの果汁で洗わないかぎり、たとえ何年経っても落とすことはできないのだ。[Khatrī 1900: 13] (筆者試訳)

あくまでも変身ではないため、相手との容姿の差によっては上手く変装できない場合もある。例えば、チャプラーが娘ほどの年の差があるマードヴィーに変装した際、とても注意深い相手に、その年齢差から変装であることが見破られてしまうのだ [Khatrī 1900: 45]。

幻術使いは薬品や粉・付け髭・ホクロを使って、化粧をするように顔を変える。そしてそれは変身ではなく、あくまでも現実的な行為の結果であるように描写される。これは変装を解く場面からも言えることであり、ヴィジャエガル国の王宮の庭園でチャンパーに変装した幻術使いを捕らえたチャプラーは、偽チャンパーの顔を水でごしごしと洗って正体を暴くのである [Khatrī 1892a: 10]。

3-3. ティラスミー・アエーヤーリー小説とダースターン

ここで留意すべき点は、ティラスミー・アエーヤーリー小説の最大の特徴とも言えるこれら二つのモチーフを、カトリー自身が生み出したのではないということであろう。「迷宮」も「幻術使い」も同時代に出版されていたダースターン (Dāstāna) やキッサ (Kissā) と呼ばれるペルシャ文学の伝統的な物語ジャンル¹⁹⁾の中で描かれていた。カトリー自身は明言していないけれども、ダースターンとティラスミー・アエーヤーリー小説に描かれたモチーフを比較すると、カトリーがダースターンから着想を得たことは明らかである。

19世紀後半、ダースターンやキッサーはヒンディー語に翻訳されてインドで広く読まれていた。例えば『ハーティム・ターイー物語』(*Kissā Hātima Tāī*)は、古くは1838年にペルシャ語からヒンディー語に翻訳されているけれども、その後30年ほどの記録は得られない。ところがカトリックが執筆活動を始める前の時期には、ヒンドゥスターニー語からの翻訳も含めて1874年・1877年・1878年・1885年に2冊・1889年と繰り返し出版されているのである[Blumhardt 1893; 1902]。この物語はハーティム・ターイーの誕生から始まり、幼少期を通して起こる様々な出来事が描かれている。その後、決して結婚しないと心に決めた王女フスン・バーノーが登場し、求婚者たちに七つの難題を課す。ハーティムは狩りの最中に森を彷徨っていた求婚者の一人に出会い、今にも死にそうなその男に代わって試練を乗り越え、王女を勝ち取ることを約束する[Pritchett 1985b: 3]。

ダースターンを代表する『ティリスメ・ホーシュルバー』(*Tilism-e Hošrbā*)に描かれた「迷宮」は魔術師によって作られ、何万人もの魔術師が住む地域を指す。そこに入り込んだ者は、魔術師を倒して迷宮を征服しない限りその世界から逃れることはできない。

魔術師の集団が惑星や宇宙の魂を吹き込むため、神秘学を使って、迷宮あるいは魔法の世界を創造したと言われている。…アフラーシヤーブはホーシュルバーの皇帝となり、迷宮の支配者となった。アフラーシヤーブとその妻、皇后ヘイラートはホーシュルバーの三つの地域——明白の地・隠密の地・暗黒の地を支配している。これらの地域もまた迷宮であり、魔術師の王子と王女らによって治められた何千もの建物・堀・庭々・宮殿で満たされた無数の領土と、小さな迷宮を有している。[Farooqi: XXXIV] (筆者試訳)

このように『ティリスメ・ホーシュルバー』に描かれた迷宮は非常に大規模なものであった。これに対して『ハーティム・ターイー』に描かれた迷宮はより

規模が小さく、『チャンドラカーンター』の迷宮に近い。フスン・バーノーの七つ目の質問に答えるために、ハーティムは生きては出られないとされる危険な「旋風の大浴場」という魔法の世界に入らなければならなかった[Pritchett 1985b: 5]。その迷宮にはホーシュルバーのように多くの魔術師が暮らす町もなければ、そもそも魔術師すら存在しない。プリチュットは『ハーティム・ターイー』に描かれた迷宮は、ホーシュルバーのような迷宮を単純化したものであるとしている[Pritchett 1985b: 8-9]。その迷宮の成り立ちもチューナールの迷宮に類似しており、とある王が貴重なダイヤモンドを保管するために作らせたものであった。

また、ビーレンドル王子らが書物の記述を頼りに様々な行動を起こしたように、ハーティムも迷宮から逃れるために、迷宮の門に刻まれた記述にしたがって鸚鵡の頭を射貫き、鸚鵡が飲み込んだダイヤモンドを手に入れる[Pritchett 1985b: 7]。このように、書かれたものの指示に従って行動するという点も類似している。

一方、幻術使いに関して見ると『ティリスメ・ホーシュルバー』に描かれたアエーヤール(トリックスター²⁰)は「狡猾さ・機敏さ・熟練した変装で知られる男女の戦士」であり、変装と失神薬を駆使して魔術師に立ち向かう。以下は『ティリスメ・ホーシュルバー』を代表するトリックスターのアマルが変装する場面である。前述したテージが変装する描写と酷似していることは特筆すべきである。

アマルは茂みから出てきて、用を足している少女に縄を投げた。少女が悲鳴をあげると、少女の口にトリックスター特製のボールを詰め込み、薬を飲ませて失神させた。少女を木に縛り、鏡を自分の顔の前に置いて色粉やトリックスター特製のローションを塗り、少女に似せて自分の顔を変えた。少女の服を脱がせ、それらを身につけた。少女を縛ったままその場を離れ、アマルは従者の一行に合流するため先を急いだ。[Farooqi: 13] (筆者試訳)

アマルは変装と失神薬のほかにも、あらゆる生き物と会話できる力や美しい声などを天使から授けられていた。また、羽織ると姿が見えなくなるマントや大きくて重いものでも軽々と運べるネットなど、様々な魔法の道具を持っている [Farooqi : 11]。テージとアマルに見られる違いは、このような超俗的要素が描かれているか否かである。

ダースターンは迷宮や幻術使いの描写をあくまでも非現実的に描く一方で、『チャンドラカーンター』三部作ではより現実的な描写が試みられている。つまり『チャンドラカーンター』三部作では、迷宮や幻術使いの摩訶不思議な描写から一歩先に進み、その不可思議な事象に現実的な説明付けが行われるのである。チャンドラカーンター王女を丸呑みにした鷲の像は、実は滑車や車輪の仕掛けによって動いていた。森の娘とサードゥーが忽然と姿を消したのは、二人の立っていた地面に扉があり、そこから地下へと続く階段があったからだ [Khatrī 1892d: 9]。迷宮の剣に触れた者が気絶するのは、剣に電気が流れるためである [Khatrī 1899b: 47]。このような説明に信憑性があるか否かは別として、カトリーはあらゆる不可思議な描写を科学的に説明しようと試みていた。この点こそがカトリーの独創性であり、それによってティラスミー・アエーヤーリー小説はより興味深いものへと進化し得たのである。風変わりな信じがたい出来事を描き、さらに実際にあり得るのだと解き明かすことで、カトリーは読者に二重の好奇心を起こさせたのだった。

4. おわりに

本稿ではカトリー作品、なかでも『チャンドラカーンター』三部作に焦点を当て、その物語に描かれた二つのモチーフを紹介した。『チャンドラカーンター』の物語の大きな流れは、王女に恋する王子が苦難を乗り越えて王女と結ばれる恋愛物語である。しかし実際に描かれる物語は、王子が幻術使いと共に敵との攻防を繰り返したり迷宮の中を冒険したりと、ダースターンの物語に極めて近い。王子と王女の恋物語は単に冒

険への動機づけとして用いられており、読者が真に惹きつけられるのは恋する王子の女々しい姿ではなく、暗躍する幻術使いらや複雑怪奇な迷宮内での登場人物らの奮闘である。カトリーが生み出したこの物語に読者は夢中になった。

カトリーの没後50年目の1963年に出版された『デーヴキーナンダン・カトリー追悼集』(*Devak-nandana Khatrī Smṛti-grantha*) には、カトリー作品の個人的な読書体験についての記述が幾つか見られる。これらの読書体験から、当時の読者の生き生きとした姿を垣間見ることができる。ここでは追悼集に寄稿したクリシュナビハーリー・ミッシュル (Kṛṣṇabihārī Miśra) とアムリトラール・ナーガル (Amṛtalāla Nāgara) の体験談を紹介したい。

まずミッシュルは、自身の幼少期を振り返って次のように述べている。

町中でも自宅でも『チャンドラカーンター』と『サンタティ』の話で持ちきりであった。叔父のブラジラージさんと父も『チャンドラカーンター』を熱心に読んでいた。当時、彼らの娯楽はこの小説でまかなわれていたと言ってもいいだろう。父がブラジラージさんに読み聞かせ、それを私も隣に座って聞いていたものだ。その物語はとても面白く感じた。次第に私は自分で読んで楽しむようになり、『チャンドラカーンター』と『サンタティ』を読むことで、ヒンディー語に対する愛着も強くなっていった。知識と娯楽が一度に得られたのである。その時から今でも年に数回は、これらの小説を読んでいる。[Miśra: 11]

読み聞かせの聞き手としての叔父とミッシュル、そして聞き手から読者へと変わったミッシュルの姿がここから見て取れる。また、ナーガルは七年生²¹の頃の体験を次のように回顧している。

地理の先生が『サンタティ』を褒めて、この本を読むためにヒンディー語を学んだのだと言った。

その後、生徒たちの間で『チャンドラカーンター』と『サンタティ』が流行した。どこに、誰のもとに、どの図書館に『チャンドラカーンター』があるのか、その捜索がはじまった。[Nāgara: 50]

自分も『チャンドラカーンター』を読みたいと思ったナーガルであったが、父親に夏休みが始まるまで読んではいけないと禁止されてしまう。物語を最後まで読まないで気が済まなくなるほど面白く、勉強する時間を取られてしまうという理由からであった[Nāgara: 50]。

娯楽小説を読むのに身分の上下も関係ない。カトリー作品の読者は領主や地主から農民・肉体労働者までの全階層に存在していた[Madhureśa: 58]。大邸宅の五階で主人が蚊帳のついた寝台に横たわり、ランプの明かりの中で『チャンドラカーンター』を読んでいるその時に、同じ建物の最下階の部屋の、油皿の嫌な臭いのする煙で霞んだ明かりの中、毛布にくるまった門番も『チャンドラカーンター』を読んでいたのである[Kāśikeya: 21]。

『サンタティ』の最後で、カトリーは次のように述べている。

『獅子座三十二話』や『屍鬼二十五話』などの物語を、人々が余暇に興味を持って読んでいた時代があった。それから『四人の托鉢僧の物語』や『千夜一夜物語』の物語の時代がやって来た。そして今、このような小説の時代である。今でも人々が歴史的な書物を好んで読む時代は程遠い。その時代が来たときに、『カター・サリット・サーガラ』のように『チャンドラカーンター』もこう言われるだろう。このような書物が、母なるインドの子供たちの娯楽となっていた時代もあったと！ 神よ、その時代を直ちにもたらしたまえ。[Khatrī 1905: 107]

カトリーは『チャンドラカーンター』が過去の名作と同じように人々の記憶に残ることを望みながら、ヒンディー文学の発展と受容の拡大を願っていた。現在、世界文学の中でも一流と評される状況にはないヒンディー文学がカトリーの想像した姿かどうかは疑問であるが、『チャンドラカーンター』は間違いなく人々の記憶に残り続けている。迷宮と幻術使いが登場する不思議な物語に多くの人々が心を奪われた時代があったという事実は、決して忘れられることはないだろう。

参考文献

- Ānanda, Vimalēśa, 1990, *Hindī ke Kuthūhalapradhāna Upanyāsa*, Anurāga Prakāśana, Nāī Dillī.
- Farooqi, Musharraf, 2009, *The Land and the Tilism: A First Translation of the World's First Magical Fantasy Epic, Tilism-e Hoshrubā, Book One* [United States: Urdu Project].
- Gosvāmī, Kiśorīlāla, 1904, *Nātyasambhava: Rūpaka*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 1922, *Gupta Godanā*, Lahari Press, Benares City.
- Jauhara, Harikṣhṇa, 1916, *Kamalakumārī vā Tilisma Nīlama*, Lahari Press, Benares City.
- Kāśikeya, Rudra, 1963, “Devakīnandana Khatrī: Vyaktitva aura Kṛtitva” *Bābū Devakīnandana Khatrī Smṛti-grantha*, Laharī Buka Dīpo, Vārāṇasī, pp. 13-22.
- Khatrī, Devakīnandana, 1892a, *Candrakāntā: Upanyāsa*, Pahalā Hissā, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1892b, *Candrakāntā: Upanyāsa*, Dūsarā Hissā, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1892c, *Candrakāntā: Upanyāsa*, Tīsarā Hissā, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1892d, *Candrakāntā: Upanyāsa*, Cauthā Hissā, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1898a, *Candrakāntā: Upanyāsa*, Pahalā Hissā, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1898b, *Candrakāntāsantati*, Pahalā Hissā, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1899a, *Candrakāntāsantati: Bārahavām Hissā*, Laharī Presa, Kāśī.

- , 1899b, *Candrakāntāsantati: Chaṭhāvām Hissā*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 1899c, *Candrakāntāsantati: Terahāvām Hissā*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 1899d, *Candrakāntā: Upanyāsa, Dūsarā Hissā*, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1899e, *Candrakāntā: Upanyāsa, Gorshā Bhāshā*, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1899f, *Upanyāsalaharī: Māsika Patra*, Jilda 4, Nambara 10, Lahari Press, Benares City.
- , 1899g, *Upanyāsalaharī: Māsika Patra*, Jilda 4, Nambara 11-12, Lahari Press, Benares City.
- , 1899h, *Upanyāsalaharī: Māsika Patra*, Jilda 5, Nambara 1, Lahari Press, Benares City.
- , 1900, *Upanyāsalaharī: Māsika Patra*, Jilda 5, Nambara 2-3, Lahari Press, Benares City.
- , 1905, *Candrakāntā Santati: Caubīsavām Hissā*, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1906, *Candrakāntā Santati: Ikkīsavām Hissā*, Laharī Presa, Banārasa.
- , 1907a, *Narendra-Mohinī*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 1907b, *Śaitāna*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 1908a, *Candrakāntā: Upanyāsa*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 1908b, *Chandrakanta: Novel*, Lahari Press, Benares.
- , 1911, *Kājara kī Koṭharī*, Lahari Press, Benares City.
- , 1912, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī, Pāñcavām Hissā*, Lahari Press, Benares City.
- , 1913, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī, Chaṭhāvām Hissā*, Lahari Press, Benares City.
- , 1914, *Kusumakumārī: Upanyāsa*, Lahari Press, Benares City.
- , 1915, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī, Dūsarā Hissā*, Lahari Press, Benares City.
- , 1916a, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī, Chaṭhāvām Hissā*, Lahari Press, Benares City.
- , 1916b, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī, Tisarā Hissā*, Lahari Press, Benares City.
- , 1917a, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī, Pahālā Hissā*, Lahari Press, Benares City.
- , 1917b, *Birendrabīra: athavā Kaṭorā Bhara Khūna (Pahālā Hissā)*, Lahari Press, Benares City.
- , 1917c, *Lailī Majanū*, Laharī Presa, Kāśī.
- , 2000, *Candrakāntā*, Sanmārga Prakāśana, Dillī.
- , 2012, *Candrakāntā*, Diamond Books, New Delhi.
- , 2016, *Candrakāntā*, K. K. Publications, New Delhi.
- Khatrī, Durgāprasāda, 1935, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī*, Laharī Buka Dīpo, Banārasa Siṭī.
- Madhureśa, 1989, *Devakīnandana Khatrī*, Sāhitya Akādemi, Nayī Dillī.
- Mísra, Kṛṣṇabihārī, 1963, “Candrakāntā aura Merā Parivāra” *Bābū Devakīnandana Khatrī Smṛti-grantha*, Laharī Buka Dīpo, Vārāṇasī, pp. 78-82.
- Nāgara, Amṛtalāla 1963, “Hindī Upanyāsa Sāhitya ko Devakīnandana Khatrī kī Dena” *Bābū Devakīnandana Khatrī Smṛti-grantha*, Laharī Buka Dīpo, Vārāṇasī, pp. 50-55.
- Rāya, Gopāla, 1965, *Hindī Kathā Sāhitya aura Usake Vikāsa para Pāṭhakom kī Prabhāva*, Grantha Niketana, Patnā.
- Śarmā, L. R., 1993, *Upanyāsakāra Devakīnandana Khatrī*, Neśanala Pabliśiṅga Hāusa, Nāī Dillī.
- Śukla, Rāmacandra, 1972, *Hindī Sāhitya kī Itihāsa*, Nāgarī Pracārīṇī Sabhā, Kāśī.
- Varmmā, Nihārācanda, 1915, *Motīmahala yā Lakshmī Devī*, Lalita Presa, Kalakattā.
- Varmmā, Rāmālāla, 1911, *Putalīmahala yā Gulābakumvarī*, Hitacintaka Presa, Banārasa Siṭī.
- Yugeśvara, 1994, *Devakīnandana Khatrī Samagra: Candrakāntā, Candrakāntā Santati (24 Bhāga) sāhita Khatrījī ke Anya Sabhī Pañcom Upanyāsa Eka Jilda meṁ*, Hindī Pracāraka Sansthāna, Vārāṇasī.
- 高橋明, 1990, 「バーラテンドウ・ハリシユチャンドラの文学観：ヒンディー文学における功利主義的文学観とその限界」『論集第3号』大阪外国語大学, pp. 149-174.
- 藤井毅, 1991, 「近代インド諸語文献所蔵調査について：ヒンディー・ウルドゥー語資料をめぐって (1)」『南アジア研究 第3号』日本南アジア学会, pp. 143-156.

ウェブサイト

- Pritchett, Frances, 1895a, “Chapter One: Qissa and Dastan” *Marvelous Encounters: Folk Romance in Urdu and Hindi* (http://www.columbia.edu/~itc/mealac/pritchett/00litlinks/marv_qissa/index.html) 2018.10.15.

——1895b, “Chapter Three: Qissah-e Hatim Ta’i” *Marvelous Encounters: Folk Romance in Urdu and Hindi*

(http://www.columbia.edu/itc/mealc/pritchett/00litlinks/marv_qissa/index.html) 2018.10.15.

Taalismaan, Promos, <http://www.vinodchoprafilm.com/promos/taalismaan>, 2018.7.25.

Taalismaan, Synopsis, <http://www.vinodchoprafilm.com/synopsis/taalismaan>, 2018.7.25.

目録

Blumhardt, J. F., 1893, *Catalogues of the Hindi, Panjabi, Sindhi, and Pushtu Printed Books in the Library of the British Museum*, London.

——, 1902, *Catalogue of the Library of the India Office, Vol. II, Part III, Hindi, Panjabi, Pushtu, and Shindhi Books*, Eyre and Spottiswoode, London.

——, 1913, *A Supplementary Catalogue of Hindi Books in the Library of the British Museum, Aquired during the year 1893-1912*, London.

Blumhardt, J. F., Wilkinson, J. V. S., 1957, *A Second Supplementary Catalogue of Printed Books in Hindi, Bihari (Including Nepali or Khaskura, Jaunsari, Mandeali, &c.) in the Library of the British Museum*, The Trustees of British Museum, London.

Catalogue of Hindi Books, 1903-44.

——, 1945-55.

——, 1956-75.

South Asia Microform Project, *Statement of Particulars Regarding Books and Periodicals Published in the United Provinces*.

注

- 1 本稿はカトリー作品の紹介とモチーフの解説を主たる目的としているため、カトリーとその作品に関する先行研究については別稿で整理して紹介する予定である。
- 2 3 *idiots* (2009) や P. K. (2014) を制作した Vinod Chopra films による。
- 3 Vinod Chopra films のホームページにて視聴可能 [Taalismaan, Promos]。
- 4 Vinod Chopra films によると、*Taalismaan* は未だ制作中である [Taalismaan, Synopsis]。
- 5 Harikr̥ṣṇa Jauhara・Nihārācanda Varmmā・Rāmālāla Varmmā らによるティラスミー・アエーヤーリー小説が確認できる [Jauhara; Varmmā 1911; Varmmā 1915]。また、出版社に月数ルピーで雇われて書く作家も存在し、利益を求めてティラスミー・アエーヤーリー小説が量産された結果、その質が低下していった [Ānanda: 194-195]。『チャンドラカーンター』の模倣作品が出回っていることに関して、カトリーも読者に注意喚起している [Khatrī 1912]。
- 6 ヒンディー文学における探偵小説の創始者。
- 7 ウルドゥー語およびヒンディー語の作家、編集者。
- 8 高橋は、近代ヒンディー文学の創始者であるバーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ (Bhāratendu Hariścandra, 1850-1885) の作品を例に挙げ、「今日インドで彼の作品を文学として好んで愛読しているというような読者がまずいないのはどうしてか」[高橋: 151] と疑問を呈している。
- 9 資料 1-3 の『チャンドラカーンター』三部作の出版状況を参照のこと。『チャンドラカーンター』は 1968 年出版の第 56 版が確認できる。また、近年では他の出版社からも出版されている。例えば、[Khatrī 2000] [Khatrī 2012] [Khatrī 2016] など。
- 10 本章は、科学研究費 基盤研究 (B) 「南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承」(研究代表者: 水野善文) により 2018 年 8-9 月に大英図書館で実施した資料調査に基づいている。
- 11 [Blumhardt 1902] に記録されたカトリー作品は、わずか一冊のみである。
- 12 目録には ‘2 pt’ と記載されているが、同じ請求記号が記された原本は第 1 章初版である。
- 13 『ブートナート』第 3 章第 3 版の最後に『ウパニヤース・レヘリー』の広告が掲載されており、そこに「デーヴキーナンダ・カトリーによる有名な小説『チャンドラカーンター・サンタティ』はこの『ウパニヤース・レヘリー』の中で順番に出版された」と記載されている [Khatrī 1916b]。

- 14 ゴースワミーによる *Nāṭyasambhava: Rūpaka* の標題紙裏に、「この *Nāṭyasambhava: Rūpaka* の版權は、個人的な友人であるデーヴキーナンダン・カトリーに喜んで委ねた」と記されている [Gosvāmī 1904]。
- 15 この概要は筆者がヒンディー語原文から日本語に全訳したものに基づいている。
- 16 ドゥルガープラサードがカトリーの後を継いで『ブートナート』を執筆するにあたり、カトリーから何かしら助言を得たかどうかは不明である。
- 17 カトリーは ‘bayāna’ (「声明・表現」の意) と表現している。
- 18 注記の中で、該当する章と節の番号を提示している場合もある。
- 19 ペルシャ文学では主に「キッサー」が用いられ、ウルドゥー文学では 1830 年以降、「長いキッサー」をダースターン、「短いダースターン」をキッサーと区別するようになった [Pritchett 1985a: 2-3]。
- 20 ファルキーによる英訳で *aiyāra* は「アエーヤール」あるいは「トリックスター」と表記されている。トリックスターとは物語を引っかき回すいたずら好きとして描かれる者のことであり、『ティリスメ・ホーシュルバー』の代表的なアエーヤールであるアマルは特にこの性質を持っている。
- 21 日本の中学二年生に相当。

資料1: 『チャンドラカーンター』出版状況

出版年	月日	章	版:部数								
1892	--	1	1:--	1906	12/11	2	6:1000	1924	*10/31	1-4	new:5000
	--	2	1:--		*8/3	--	7:2000	1928	12/23	1-4	new:7000
	--	3	1:--	1908	*12/10	2	7:2000	1932	7/23	1-4	new:8000
	--	4	1:--		*12/31	3	7:2000	1935	7/14	--	new:8000
	--	1-4	--:--	1909	*3/25	4	8:2000	1941	12/1	1	21:2000
1898	--	1	3:--	1910	2/1	1	8:1000		12/3	2	21:2000
1899	--	2	3:1000	1913	7/16	2	new:1000		12/5	3	21:2000
	--	3	3:1000		12/20	1-4	new:2000		12/9	4	21:2000
	--	4	3:1000	1915	5/30	1-4	new:5000	1944	8/10	1	22:1000
	--	1-4	--:--		6/25	3	new:1000		8/11	2	22:1000
1903	--	1	6:1000		6/26	4	new:1000		8/12	3	22:1000
1904	5/15	1	6:1000	1918	10/8	1	new:1000		8/12	4	22:1000
	12/6	4	6:1000	1921	11/29	2	--:500	1968	--	1	56:4000
	12/8	3	6:1000	1922	*10/3	1-4	new:5000		--	4	56:3000

資料2: 『チャンドラカーンター・サンタティ』出版状況

出版年	月日	章	版:部数								
1898	--	1	2:--		*7/2	7	4:3000	1913	2/22	6	new:1000
	--	2	2:--		8/30	15	3:1000		*2/25	13	new:2500
	--	3	2:--		9/8	21	2:1000		*2/27	14	new:2000
	--	10	--:--		10/30	3	4:1000		3/2	16	new:1000
	--	11	--:--		*12/10	8	1:3000		6/5	18	new:1000
1899	--	4	2:--	1907	*12/10	9	1:1000		*6/10	16	new:2500
	--	5	2:--		*1/1	10	1:3000		6/12	17	new:1000
	--	7	2:--		*2/1	11	1:3000		*7/15	15	new:2500
	--	15	1:--		2/2	4	4:1000		7/20	19	new:1000
	--	16	1:--		*4/1	12	1:3000		*7/23	18	new:2500
	--	12	--:--		*5/4	13	1:3000		*9/25	17	new:3000
	--	13	--:--		*6/18	14	1:3000		*9/28	19	new:2500
	--	14	--:--		8/1	22	2:1000		10/20	20	new:1000
	--	15	1:--		*8/25	15	1:3000		*12/16	20	new:2500
	--	16	1:--		*10/7	16	1:3000		*12/18	21	new:2500
1900	--	8	2:--	1908	*12/1	17	1:3000	1914	*3/21	22	new:3000
	--	9	2:--		*12/31	18	1:3000		*3/26	23	new:3000
	--	17	1:--		*1/22	19	1:3000		4/15	7	new:1000
	--	18	--:--		*2/20	20	1:3000		*4/15	11	new:3000
1904	12/13	7	3:1000		*8/22	22	1:3000		*6/8	2	new:3000
	12/16	9	3:1000		*11/1	23	1:3000		*6/25	24	new:3000
	12/18	18	2:1000	1909	11/5	23	2:1000	1915	3/11	1	new:3000
	12/20	19	2:1000		*3/23	24	1:3000		7/20	8	new:1000
	12/22	20	2:1000	1910	*4/2	21	1:3000		*8/7	12	new:3000
	12/--	23	1:--		*8/1	1	new:2000	1916	*3/26	10	new:2000
1905	1/31	10	3:1000	1911	*11/1	2	new:2000		*4/12	9	new:3000
	2/2	11	3:1000		*3/4	3	new:5000		*4/20	14	new:3000
	6/7	1	4:1000		*3/15	4	new:5000		6/24	2	new:1000
	7/21	1	5:4000		*8/15	5	new:5000	1917	*1/19	13	new:3000
	*9/15	1	5:3000		*8/31	6	new:5000		*2/9	15	new:3000
	*10/1	2	5:3000		*9/1	4	4:3000		*4/16	16	new:3000
	*10/30	3	4:3000		*12/7	7	new:5000		*8/22	18	new:3000
	*11/20	4	4:3000	1912	*12/31	24	new:1000		*8/25	19	new:3000
	12/1	12	3:1000		*1/15	8	--:5000		*10/7	2	new:3000
	--	24	1:--		*5/5	9	new:2500	1918	*1/5	4	new:--
1906	3/1	2	4:1000		*6/28	10	new:2500		*3/24	17	new:--
	*3/15	5	4:3000		*10/2	11	new:1000		*3/25	3	new:--
	*3/30	6	4:3000		10/20	1	new:1000		*6/1	20	new:3000
	6/14	14	3:1000		*11/3	13	new:2000		*6/10	21	new:3000
					11/11	5	new:1000		*6/20	23	new:3000

1920	*9/10	24	new : 3000	1929	*6/9	2	new : 2000	1936	11/21	11	reprint : 2000
	*9/14	11	new : 3000		*6/14	17	new : 2000		11/22	4	reprint : 2000
	*9/25	1	new : 3000		*6/16	1	new : 3000		11/23	18	reprint : 2000
	*9/27	22	new : 3000		*8/2	15	new : 3000		1/24	23	new : 2000
	*11/16	4	new : 3000		*8/21	3	new : 3000		9/1	23	9 : 2000
	--	2	5 : 3000		*8/25	10	new : 3000		9/6	19	new : 2000
	*11/19	21	new : 3000		*8/27	13	new : 3000		9/22	8	new : 2000
	*11/20	23	new : 3000		*9/3	24	new : 3000		9/25	20	new : 2000
	*1/22	22	new : 3000		*9/21	5	new : 3000		5/4	3	new : 2000
	*2/2	3	new : 3000		*9/23	9	new : 3000		1939	1/21	26
1921	*2/5	24	new : 3000	1931	*9/28	6	new : 3000	1940	1/23	4	new : 1500
	*2/9	6	new : 3000		*9/28	11	new : 3000		1/25	5	new : 1500
	*4/7	8	new : 3000		*9/30	15	new : 3000		1/27	6	new : 1500
	*4/14	10	new : 500		*10/6	23	new : 3000		1/29	21	new : 1500
	*4/19	7	new : 5000		*1/2	18	new : 3000		12/3	10	new : 1000
	*10/5	12	new : 3000		*8/11	16	new : 2000		12/7	2	new : 1500
	*10/13	9	new : 3000		*8/16	1	new : 2000		12/13	12	new : 1000
	*10/20	5	new : 3000		*2/13	3	new : 2000		12/29	1	new : 1500
	*1/12	2	new : 3000		*6/9	5	new : 2000		12/9	23	10 : 1000
	*5/12	1	new : 3000		*6/13	10	new : 2000		12/15	9	10 : 1000
1922	*5/18	14	new : 3000	1932	*7/7	12	new : 2000	1941	12/15	18	10 : 1000
	*10/17	4	new : 3000		*7/9	13	new : 2000		12/19	7	9 : 1000
	*10/20	13	new : 2000		--	14	new : 2000		12/20	14	10 : 1000
	*10/20	15	new : 3000		*9/22	6	new : 2000		12/22	11	11 : 1000
	*10/24	24	new : 2000		*9/28	7	new : 2000		12/30	13	11 : 1000
	*4/11	3	new : 1000		*10/10	15	new : 2000		12/3	17	10 : 1000
	*4/14	19	new : 2000		*11/8	18	new : 3000		12/3	24	12 : 1000
	*5/18	18	new : 2000		*11/8	9	new : 2000		12/4	4	13 : 1000
	*6/1	20	new : 2000		*12/4	11	new : 2000		12/4	5	11 : 1000
	*6/2	21	new : 2000		*1/10	24	new : 2000		12/7	19	10 : 1000
1923	*6/4	6	new : 2000	1933	*1/13	4	new : 2000	1943	12/8	1	14 : 1000
	*8/10	17	new : 2000		*1/14	2	new : 2000		12/9	8	10 : 1000
	*8/12	11	new : 2000		*3/3	22	new : 2000		12/9	15	10 : 1000
	*8/12	5	new : --		*3/4	17	new : 2000		12/10	6	10 : 1000
	*8/15	22	new : 2000		*3/5	19	new : 2000		12/10	20	10 : 1000
	*10/23	23	new : 2000		*4/5	23	new : 2000		12/11	22	12 : --
	*10/25	24	new : 2000		*4/7	20	new : 2000		12/12	10	11 : 1000
	*10/2-	7	new : 2000		*6/10	1	new : 2000		12/16	2	13 : 1000
	*11/20	8	new : 2000		*1/3	3	new : 2000		12/18	21	10 : 1000
	1/24	1	new : 2000		*1/7	21	new : 2000		6/17	7	10 : 1000
1924	*7/-	10	new : 2000	1935	8/12	14	new : 2000	1944	6/21	14	11 : 1000
	*8/6	2	new : 2000		8/14	1	new : 2000		7/1	1	15 : 1000
	*2/20	10	new : 2000		8/16	2	new : 2000		7/1	9	11 : 1000
	*2/25	15	new : 2000		*8/20	5	new : 2000		7/7	13	12 : 1000
	*3/5	12	new : 2000		8/22	6	new : 2000		7/9	3	14 : 500
	*3/5	13	new : 2000		8/24	7	new : 2000		7/11	23	11 : 1000
	*3/12	3	new : 2000		8/26	10	new : 2000		7/14	24	13 : 500
	*7/26	6	new : --		*8/28	12	new : 2000		7/23	15	11 : 1000
	*7/2-	18	new : 1000		8/30	13	new : 2000		7/23	18	11 : 1000
	*5/5	20	new : 1000		10/17	24	new : 2000		7/25	11	12 : 1000
1925	*5/10	8	new : 2000	1936	11/19	15	reprint : 2000	1944	1/3	4	12 : 1000
	*5/15	12	new : 2000		11/20	17	reprint : 2000		5/5	10	10 : 1000
	*5/19	16	new : 2000		11/20	22	reprint : 2000		5/7	1	16 : 1000
	*6/5	21	new : 2000		11/20	9	new : 2000		5/10	8	11 : 500

1945	5/10	21	11 : 500	1966	7/29	14	12 : 500	1968	--	8	26 : 2100
	5/11	16	12 : 1000		--	9	26 : 2000		--	12	26 : 2500
	5/14	12	12 : 500		--	10	27 : 2000		--	13	27 : 2100
	5/15	2	14 : 1000		--	11	27 : 1500		--	16	27 : 2000
	8/2	6	11 : 500		--	15	27 : 2000		--	1	33 : 3000
	8/8	7	11 : 500		--	17	27 : 2000		--	2	31 : 2300
	12/12	9	12 : 500	1967	--	18	27 : 2000		--	14	26 : 2000
	7/19	3	15 : 500		--	22	25 : 2000		--	19	28 : 2100
	7/20	8	12 : 500		--	3	29 : 2200		--	20	27 : 2100
	7/20	23	13 : 500		--	4	29 : 2100		--	21	27 : 3000
	7/23	6	12 : 1000		--	5	28 : 2000		--	23	25 : 2100
	7/23	13	13 : 500		--	7	26 : 2000		--	24	25 : 2200

資料3：『ブートナート』出版状況

出版年	月日	章	版：部数	1919	--	2	4 : 1000	1943	7/9	5	9 : 500
1908	10/7	1	1 : 2000	1922	2/17	6	4 : 1000		7/11	1	12 : 500
1909	7/1	2	1 : 2000		10/11	2	new : 600		7/--	6	8 : 500
	8/22	1	2 : 1000		10/21	4	new : 2000	1944	8/5	5	10 : 500
1911	12/1	4	1 : 2000		12/30	5	new : 1000		12/11	3	10 : 500
1912	7/4	5	1 : 2000	1924	5/24	1	new : --		12/14	4	9 : 500
	7/4	1	3 : 1000		8/16	3	new : 1000		12/16	1	12 : 500
1913	6/5	2	2 : 1000		8/17	2	new : 1000		12/17	2	11 : 500
	7/26	6	1 : 2000	1928	3/24	1	8 : 2000	1945	7/16	4	10 : 500
	12/11	3	2 : 1000		3/24	2	new : 2000	1979	--	2	28 : 2200
1914	4/15	1	4 : 1000		6/6	3	new : 2000	1984	--	1	31 : 2200
1915	8/7	1-4	2 : 1000		--	6	6 : --		--	3	30 : 2200
	--	5	2 : 1000	1929	1/11	2	new : 2000	1985	--	4	30 : 2200
1916	7/31	6	2 : 1000	1935	8/2	5	8 : 2000	1986	--	5	27 : 2200
	11/21	3	3 : 1000	1939	1/19	2	10 : 1500	1987	--	6	26 : 2200
1918	6/2	5	new : 2000		12/10	3	9 : 1500				
	6/20	4	new : 2000		12/12	4	-- : 1500				

1) この資料は参考文献に記載した目録および原本の情報をもとに筆者が作成した。

2) 「*」はPocket editionを示す。

3) それぞれの情報が明記されていない場合は「--」で示した。